

「魔法を使つて連勝して、定期船のチケット代を稼かせごうと  
していたあなたは、途中でこの国の真実に気づいたはず  
よ」

「……ですね」イレイナは小さく頷うなずいた。

「？」意味がわからず、僕は首を傾けてしまう。

「国の真実？ 何のことぞ？」

「マクミリア。いい機会だから教えてあげる——けど、く  
れぐれも、この話は誰にも漏もらさないで頂戴ちようだい。これは私  
たちだけの秘密よ」

リリエールは砂糖たつぷりのコーヒーを飲んだあとで。  
身を乗り出し、声を沈しずめ、

「この国はね、魔法使いがないんじゃないの」

そして語る。

「存在できないのよ」

○

「昔話をしましうか。」

大昔、大魔法使いが一人いた。

男は世界平和を何よりも望んでいて、人と魔族が手を取り合つて暮らせる国を作りたいとかねてから考えていた。

平和のための国造りのために、彼は、とある島に目をつけた。

そこは魔力のるつぼのようになっていて、底知れない魔

力が地下から湧き出る、不思議な島だった。

島の存在を知ってから、男はその島にすぐさま渡り、魔力の研究を始めた。

数年、あるいは数十年もの間、彼は研究していたかもしれないわ。

途方もないほど長い時間を経て、男は島から湧き出る魔力の研究を終えた。

魔力の性質を、島の中でだけ変質させることに成功したの。

魔法などという便利すぎて危険な存在があるからこそ、争いが絶えないのではないか。力があるからあらゆる種族間で争い合うのではないか。

男は魔法を忌避きひしていた。

だから、島から湧き出る魔力を、別のものに作り替えた。それが祈りなの。

大聖堂で祈りを捧げると、ごく稀まれに聞き入れられて、願いがかなう——というのは、マクミリアでも知っているわよね。

男は人と魔族が歩み寄りやすい環境のために——島にきた者たちが互いの共栄を願い、叶えることができるように、このシステムを作り上げた。

そして、男は完成したシステムの上に、大聖堂を築き上げ、祈りを捧げた。

——どうかこの国が、人間と魔族、それと獣人じゅうじんが手を取

り合って住まうことのできる平和な国になりますように、と。

そして願いは、叶えられたの。

国に多くの種族が集まり、今や世界そのものとも呼ばれるほどになった。

男の名前はクラウドスレイン。

この国を——島を、魔法が行使できない領域に作り替えた創始者よ」

それが真相だった。

だからイレイナは時間が経つにつれ、ポーカ―を続けるにつれ、徐々に弱くなっていたのだらう。

「今はもう魔法なんてまった全く使えなくなっています。さつき使い切っちゃったみたいで、まるで魔力が湧きません。どうやらその話、嘘うそ偽いつわりはないみたいですすね」

「ええ——」

リリエールはもしかしたら、モリス支配人に相談を持ち掛けられた時点で、イレイナが外から来た魔法使いであることに気づいていたのかもしれない。

つまりポーカー対決とはイレイナの魔力を枯からせるための策でしかなくて、リリエールは端はなから解かい呪じゆなんてしていないということだった。

「ちなみにイレイナ。船のチケット代って幾いくらだか知っています?」

「三千万レインですよ、確か「イレイナは肩をすくめていた。「誰かが妨害しなければもう少しで稼げたんですけどね……」」

「私が守らなければもう少しでお縄だったけどね」「ふん、と鼻を鳴らすリリエール。「それに、もし仮に三千万レイン稼げたとして、そのあと一年間どっぴやって過ぐすつもりだったのかしら?」「

「は?」

「いえ、だから、チケットを買ってもすぐに乗れるわけじゃないのよ?」「どっぴやって一年間この国で過ぐすの?」「

「………は?」

「今売られているのは来年のチケットよ」

「……………え？」  
完全に顔から表情が消えたイレイナだった。

「当然ながら船に乗りたいなら来年までここで過くごさなければならぬわ。金を積んでももちろん通してもらえぬわ  
けないし」

「え、ちよつと言ってる意味がわかんないです」

「搔かい摘つまんで言うつと、あなたあのまま稼かせいでたら路頭に迷  
ってたわよって話よ。金を十分に稼かせいでチケットを買えた  
としても、財布さいふが再び空くっぽになった状態では、一年間こ  
こで生きるのは無理。あなたもうただの女の子なんだか

「ら」

「……………」



イレイナはじつと黙りこんでいた。